

散り際をふんばつてをり八重桜 貞勝

彼岸桜から始まって、今では桜の代名詞のごとき染井吉野を経て八重桜まで、桜は待ち焦がれた春を形容する代表的な花木である。八重桜の別称は遅桜。その名の通り、染井吉野が薄緑の葉に覆われるこの晩春に最盛期を迎える。「散り際を踏ん張っている」と言われれば、その通りと頷くばかりである。上五から下五まで一連の一句一章として読み取るとも、中七で切れた二句一章の句と捉えることもできる。前者の読み方は、直截的に八重桜の擬人化の句として受け入れるものであり、後者の読み方は、八重桜を見ながら、人が自らの来し方を顧みている句となる。

鶯の渡る野毛坂通い坂 貞勝

一句の中に同じ語を繰り返し用いる「重語」は、安易に使用すると却って句の価値を下げる恐れがあるが、掲句は「重語」の効果が良く出ている。往時の野毛坂の回想の中に今の野毛坂を観ている作者の眼前に、通勤途上に眼にし耳にした鶯が現われ出てくるようだ。表記としては、口語俳句であれば「通い坂」で良いが。文語俳句であれば「通ひ坂」となる。

生徒等の夢の壁画や風光る 真三

「夢」という言葉は、俳句では使い方が難しい言葉の一つである。作者に正面切って「…の夢」と言われれば、読み手には否定し切れないところがあるが、内実としては、作者の一人よがりで浮いたことが多いのではないか。しかし、掲句は、「夢」が実感をともなった生きた言葉として使われており、「夢の壁画」と「風光る」の照合が効いている。

筍を茹でる甘き香母の笑み ヤエ子

台所仕事や料理は、大方は母と娘の間の貴重な伝承に支えられている。男は外で働き女は家事を行なう、という性差による仕事分担論に言及するつもりはないが、このような句が読み上げられた後、すかさず男性作者が名乗りを上げたら、日本の男女均等労働も定着したものと言える。

「甘き香」に「母の笑み」と畳み掛けると、句に少し甘さが出てくるが、「甘い香り」が掲句の眼目であるとすれば、止むを得ないことなのか。

父母よりも生きて感謝の桜かな

幸

何時の間にか父母よりも多くの年齢を重ねてしまった自分がいる。風雪に耐えた一本の老木の泰然として咲き誇る姿を前にして、これまでの自らの人生にかかわって来た全ての人々と天の配剤に対する感謝の念がいまさらながら深くなる。この気持ちは分かりすぎるほど良く分かるが、「感謝」という言葉によって自分の心情を直接表すことは避けたい。例えば、「父母よりも長く生かされ桜かな」とすることもできる。「自分で生きて来たのではなく、周りから生かされて来たのだ」とする方が感謝の念がより深く表されるのではないか。

春愁のメール打つ指休みなく

ヤエ子

携帯電話で指を巧みに忙しなく動かしながらメールを発信している姿は、車中や街頭などの見慣れた風景であるが、これを「春愁のメール」と簡約した切り取り方が良い。メールの打ち手が春愁の状態にあるかどうか、すなわち他者の内心は知る由もないから、見ている作者が春愁の状態なのであろう。普通ならば、「春愁や」と置くところであるが、このようにすると平板でつまらない句となる。「春愁の」とすることによって、メールを打つ者とそれを見ている者がともに春愁にあるような雰囲気が出てきて、奥行きある句となる。

その上の鷹の狩場やひこばえゆる

友子

「上」は「かみ」と読む。その昔、鷹狩りの行なわれた場所で「ひこばえ」を見たとの句である。往時には徳川将軍家によって盛大に行なわれた鷹狩りも、明治維新後は廃れてしまった。名残の鴨場一面には、ひこばえの緑が目立つ。廃れゆく昔のものと、再生を意味する「ひこばえ」との対比が良い。浜離宮恩賜公園での吟行句。

会場・桜蔭会館

文責・増田 守

#### 【事務連絡】

同封の葉書で「案内の通り、春季通信句会を開催します。「春一切」(春の季語であれば、どの季語でもよい)で作句して下さい。締め切りは厳守にてお願いいたします。

#### 【自句自解】

空どこか歪んであたりさくら冷え

守

満開の桜も震え上がるような、一日ごとに大きな寒暖の差に見舞われた今年の春。この異常な春を記録してみたいと思った。異常気象を大いなる天行の乱れと捉え、これを「空の歪み」として切り取ろうとしたもの。